２０２４．６．１６（日）使徒１６：１１～１５

16:11　私たちはトロアスから船出して、サモトラケに直航し、翌日ネアポリスに着いた。
16:12　そこからピリピに行った。この町はマケドニアのこの地方の主要な町で、植民都市であった。私たちはこの町に数日滞在した。
16:13 そして安息日に、私たちは町の門の外に出て、祈り場があると思われた川岸に行き、そこに腰を下ろして、集まって来た女たちに話をした。
16:14　リディアという名の女の人が聞いていた。ティアティラ市の紫布の商人で、神を敬う人であった。主は彼女の心を開いて、パウロの語ることに心を留めるようにされた。
16:15　そして、彼女とその家族の者たちがバプテスマを受けたとき、彼女は「私が主を信じる者だとお思いでしたら、私の家に来てお泊まりください」と懇願し、無理やり私たちにそうさせた。

＜説教＞

これまで学んで来ているように、使徒パウロの第２回伝道旅行は、その初めからパウロ自身の考えや計画とは違うように導かれた部分が多く見られます。そのようにお導きになったのは〈聖霊〉(16:6)、〈イエスの御霊〉(7)、〈神〉(10)でした。私たちは単にパウロたちの伝道旅行「紀行」という文学作品を読んでいるのではありません。パウロたちと共におられる聖霊の働き、助け、導き、慰め、励ましについての証しを聞いているのです。人となられてこの地上に来られ、パウロたち私たちの罪のために死なれ、復活なさり、天に昇られた主イエス･キリストが、聖霊によってパウロたち私たちと「世の終わりまでいつもともにいます」というお約束の真実であることの証しを聞いているのです。聖霊に導かれているパウロたちのこの地上における福音宣教の働きと彼らが受ける迫害、彼らの栄光と苦難は、主イエス･キリストの地上での栄光と苦難の後に従うが故のものでした。

さてそのように聖霊に導かれて、パウロとシラスとテモテとルカの〈私たち〉は、マケドニアで福音を宣べ伝えるように神に召されていることをついにトロアスで確信しました(10)。それで〈ただちにマケドニアにに渡る〉(10)ために〈トロアスから船出して、サモトラケに直航し、翌日ネアポリスに着〉(11)き、ついにヨーロッパに上陸しました。そしてそこから十数km離れた〈ピリピに行〉(12)きました。

〈この町はマケドニアのこの地方の主要な町で、植民都市であった〉(12)とルカは特別に紹介しています。ローマ皇帝アウグストゥス(ルカ 2:1)がその地での戦勝記念としてローマの（退役）軍人たちを移住（植民）させ、その町の市民にはローマ市民と同じ権利が与えられました。それで、ピリピは「マケドニア地方の主要な町」、言わば「マケドニアの小さなローマ市」「ローマの風習一色の町」となりました。それで、どうやらユダヤ人の数は少なく、ユダヤ教の力もかなり小さかったようです。ある町に新しく入ったときは、最初の安息日にユダヤ人の会堂に行って、そこに集まっているユダヤ人たちまた神を恐れ敬う異邦人たちにイエスの福音を語るというのが、パウロがこれまでしてきた福音宣教の仕方でした。だから〈この町に数日滞在した〉間に、次の安息日に行く会堂を捜したことでしょう。しかし見つかりませんでした。当時は普通ユダヤ人男子が 10 人いれば会堂が建てられたそうですが、ありませんでした。神の召しに従ってマケドニアで福音を宣べ伝

えようと意気込んで来たのに、と言わばいきなりの困難に直面したと言えるでしょう。

しかしパウロたちはやはりめげなかったのでしょう。彼らは〈安息日に、…町の門の外に出て、祈り場があると思われた川岸に行き〉(13)ました。会堂はありませんでしたが〈祈り場があると思われた川岸〉のことを捜し当てた、聞き当てたのでしょう。とは言え、そこは〈町の門の外〉でした。やはり町中（まちなか）にはローマ市民意識、ローマの風習、宗教が満ちており、「聖書」だとか「天地万物の創造主、唯一の神を恐れ敬う」などということは〈町の門の外〉でやっておれ、というような「空気」だったのでしょうか。川岸の祈り場は、どこまでも「少数者たち」の居場所だったように思われます。そしてそこに〈集まって来た〉のは〈女たち〉（だけ）だったようです。パウロたちは〈そこに腰を下ろして、集まって来た女たちに話をし〉ました。〈話し〉はもちろん、イエスの福音です。

その〈集まって来た女たち〉の中に〈ティアティラ市の紫布の商人で、神を敬う人であった〉〈リディアという名の女の人〉がいて、聞いていました。〈主は彼女の心を開いて、パウロの語ることに心を留めるようにされ〉ました(14)。〈ティアティラ市〉は先にパウロたちがいた〈アジア〉(6)や〈ミシア〉(7)の近くにありました。リディアはそこ出身の異邦人で、おそらくそこで〈神を敬う人〉となっていたのでしょう。〈ティアティラ市〉では染物工業も盛んで、〈紫布〉は王侯、貴族、ローマ軍人、市民に愛された高級品でした。ピリピにまで来てその商売をしていたリディアは行動力もあり、また裕福だったと思われます。しかし、ここで私たちが目を止めるべき大事なことはもちろん〈主は彼女の心を開いて、パウロの語ることに心を留めるようにされた〉ということです。〈集まって来た女たち〉は皆〈祈り〉のために集まって来た〈神を敬う人〉ではあったでしょう。そして皆が〈パウロの語ること〉を聞きました。しかし〈主〉によって〈心を開いて〉頂いたリディアが〈主を信じる者〉(15)とされました。〈主を信じる〉とは〈主イエスを信じる(31)ということです。この「心を開く」の「開く」は、あのエマオの途上で二人の弟子たちの〈目が開かれ、イエスだと分かった〉（ルカ 24:31)の「開く」、またそのとき二人にイエスが〈聖書を説き明かしてくださ〉（同 24:32)ったときの「説き明かす」、更にそのイエスが二人と他の弟子たちに現れて彼らに〈聖書を悟らせるために彼らの心を開い〉(同 24:45)てくださったときの「開く」と同じ言葉です。主イエスの復活を信じられなかった弟子たちの心の目を開いてくださったのと同じ復活の主イエスが、イエスの御霊が、リディアの〈心を開いて〉くださったので、彼女は〈パウロの語ることに心を留めるように〉なりました。それで彼女はイエスが「生ける神の子キリスト」だと分かり、〈主を信じる者〉〈主に忠実な者（第三版)〉となり、〈彼女とその家族の者たちがバプテスマを受け〉(15)ることになったのです。

更に彼女はパウロたちに、〈「私が主を信じる者だとお思いでしたら、私の家に来てお泊まりください」と懇願し、無理やり〉〈そうさせ〉(15)ました。「懇願し、無理やりそうさせた」という言葉は、やはりエマオ途上の二人がイエスに「一緒にお泊まりください」と言って「強く勧めた」（ルカ 24:29)の「強く勧めた」と同じです。そんなことからも、〈主を信じる〉ことだけでなく、パウロたちのような主の働き人を自分の家に招き入れ泊めるという奉仕もまた主が彼女の心を開いてくださったからだと言うことができます。そんなリディアの家を拠点としてパウロたちはピリピ伝道を行いました。後に〈牢を出た二人はリディアの家に行った。そして兄弟たちに会い、彼らを励ましてから立ち去った〉

(16:40)と記されます。このようにリディアの家が「家の教会」となり、ピリピ教会が生まれました。更に後にはパウロ自身がピリピの教会に次のように書き送ります。〈あなたがたが最初の日から今日まで、福音を伝えることにともに携わってきたことを感謝しています〉（ピリピ 1:5)。〈ピリピの人たち。あなたがたも知っているとおり、福音を伝え始めたころ、私がマケドニアを出たときに、物をやり取りして私の働きに関わってくれた教会はあなたがただけで、ほかにはありませんでした〉（同 4:15)と。生まれたてのピリピ教会はただちにパウロの働きを金銭的にも支援するようになりました。すべては主イエスが聖霊によってリディアの心を開いてパウロの語ることに心を留めるようにしてくださり、主イエスを信じるようにしてくださったからでした。

ここに集う私たち一人一人が、この地にあって、主イエスによって心を開いて頂き、主を信じる者とされ、生涯をかけて主のみこころ（御意思）を求め、主の御意思に従い、主に全てを委ね、主を証ししていかれるように、主イエスの御名によって祈ります。